

なつかしく
にさはば
かりはあ
らぬなん
めり。

御尤のう
らみとぞ
んずれ。

人間おの

妾の花にやどりたまはぬは、蕩りのうすまが故にはべるか、さりとはあまりに心づよき業と恨みにおもふものよ、あたら花咲きては、心なき俗人の手にふれて、身は泥田のうちに投げすてられ、ふる春雨に屍とさらすこと、前世いかなる罪業を犯したるものかと、ひたすらに嘆きつたれて、熱きなみだに咽ぶばかりなるぞかし。
妾に比べては、すみれの君のおもふ毎に、つねぐいひけるやう、すみれの君は、咲きては君の寵を得、摘れては少女のあたゝかきみ手に抱かれ、いかばかりかうれしきことならむ、なごて、うちやましくぞおもはぬことのあるべきにや、いかに君よ……
あはれわが胡蝶の君よ、わがこのあさましき境遇を、あはれと思

づからこ
の般の薄
命あり。

愛すべき
の景趣な
るか。

ほして、せめては、しばしの宿りをも許したまへ、アアうたてや、同じ草花さうまれて、同じ春の日の情に咲けるものをかくも愛憎のへだたるとは、妾の優にやさしきか、それとも匂ひの厭ふべきものあるべきか、さりとても心に刺はもたぬものを、ア、愛らしの胡蝶の君よ、ア、戀しの胡蝶の君？

○闇の真趣

月明の夜は清麗なり、たとへば幼子の裸像の如し、若きに富む。皎々たる月光、霜の如く雪の如き時、立つて江にのそまらずや、流るゝ月影、さながら銀蛇のうねれるに似て、嫦娥の君は若き笑顔もて天上のおもしろさ、楽しさをさ、やくかとも思はる。

比喩の妙い
にふべし
此の如き
け繪に
書けぬ
ぞ。

誰ぞ、正
しくしか
いふ誰
なるら
め。

朧月の夜は濃麗なり、たとへば、花にくるへる双蝶の胸に似たり。
花、雨の如く落つる日、紅雲の下を逍遙へ、薄絹をおほひし笑顔は
宛もかのはにがみの少女が、戀知りそめし時物言ひかけられて、顔
をそむくるが如からじや。
ア、斯くの如く月は闇黒の神に勝ちて、人の子に楽しみを與ふる
ものなり、即ち樂園の姫君なり、天にある神苑の一部分を地球に齎
すものなり。

月の美たる斯の如し、されど知らずや、その闇黒の神のみ手の裏に
も美しき慈愛、崇高の籠れるを。

誰ぞ、闇黒の眞趣を知らずして、日の出づるを希ふものは！今、月

樂園に遊
はる予
はそん
の美し
き夜に
いて。

その見る
ところ
のづか
あり種
の趣。

を美しくしき女神を見ずして、その寒きこと刺す如き光の中に、無限
の悲哀と、憂愁とを含める神として見ずや、闇黒は實に慈母の如く
暖かし、而してその中に犯すべからざる森殿、崇高を見る。
何處にてもよし、闇の夜にして立て、悲愁の色も見ず、杞憂の心は
尙更わき出でじ、限りなき詩趣は臍底に滾々として泉の如く、只星
斗のみ空に欄干として平和をまた、けり、時、人は安らげく夢の樂
園に遊ぶ。

高きみ位にゐます人も、獄につながる、囚人も、月に對して斷腸の
思にたへざる遊子も等しく！

月を美しといふはたそ、そは心も楽しく悦ばしき時なるべし、妹と

亡き妹を
戀するあ
たりの断
勝の情と
こそと思
はる。

悲哀の神
となり涙
の姫とな
る、その
見る人に
よれるの
み。
何んであ
らう？わ
れはこれ

とも鬼事まにごとをする時なるべし、高樓の欄たかを叩いて盃さかづきをあぐる時なるべし、その妹いもうと逝ゆき、高樓も壊やぶれて霜寒しもやまき時、妹が奥津城おくつぎの傍かたはらに立ちて月を見ずや、残る石垣いしがきの上に、廢殘の身を横たへて月を眺めずや月は涙を流さでは置かざるべし、斯くして月は悲哀の神なり、涙の姫なり、奥津城の月、廢城の嫦娥てんがを樂しと誰がいふものぞ。
月に對して、うたゝ亡き人を思ひ、逝ゆきし榮華を偲おもふ遊子あそびこよ、人の子よ、出で、闇黒の温密ぬくひに接せずや、その慈愛の手に抱かれずや。

○妾の信仰

妾には只一つ非常に信仰してゐる神がある、妾は只一つ非常に尊ぶべき生命がある。

を知れり

君の信仰
は實にお
もしるし
眞に信仰
の本趣が
それなれ
ば、それ
を敬すべ
きはき君
にねばら
ないらぬ

その愛、
實に君の

妾の信仰してをる神といふのは、兄弟には友、朋友には信、父母には孝、君には忠、國を愛す所謂國家の柱石ちゆうせきともなるべきものである、妾の尊ぶべき生命といふのは、信仰してをる神が妾の身に宿つてをる、神そのものである、妾は神の命令によつて活動するから、一度も怒りの心が起つたこともなく、又一度も憂うれひをしたこともない、世にこれ程尊い神や生命が又とあらうか、妾は決してなからうと自信してをる。
この尊い神とは誰であらう？何であらう？
愛！そのものである、一般人士が、もし愛の神を信じたならばどうであらう。

いふとこ
ろの如し
である
たがその
愛が岐路
に入ると
となつて
の望む
真然。

比喩近く
妙して却て
愛の説決

世は少しの風波をも生ぜず、安穩に閑々として暮さるのみでなく、
尙かへつて光明を放ち、^{あやう}露々として人世を過さるゝことであらう。
若し人世に愛といふ光明がなかつたならばどうであらう、世は闇黒
である。

恰も宇宙に太陽なきが如く、^{あまくま}暴行を逞しくして、一家安々と
枕並べて寝ることは出来ない、決して出来ないと断言する。

愛あるが爲めに人世は平和である、東北三縣の慘狀、米國桑港の慘
狀で、も證することが出来る、我國否、世界に愛の神を信仰してを
るものが一人なかつたならば、どうであらう？三縣人民は悉く飢え
死するかも知れない、桑港の人民は家なくて死し終つたかも知れな

道樂の説

して異論
なきこと
なり、^なけ
れども、^なけ
の信仰が
極端に自
由に愛を
由に愛を
どに變形
しなしい
うにしい
きこさな
れ。

い愛は實に慈悲の神である。

世に若し愛の神がなかつたならば、争闘は此處にも彼處にも、絶ゆ
ることはあるまい、人はあらゆる罪惡を極めるであらう、人は皆罪
人とならねばならぬ。

愛は實に平和の神である。

妾はかくも愛を信じてをるから、名譽にまよはず、黄金に迷はず、
自利を恣にせない。

要するに、妾の理想の人物とは、愛の神を信仰したその人である。

○道 樂

道樂と何ぞ、或人答へて曰く、酒に女を身を持壞じ、果ては賭博よ

筑波のむらさき今
一つむら
さきの色
の……。

それがそ
れ色の世
ですもの
を。

あなたは
その芥子
がおすき

紫は清浄である、山を取り巻く霞の紫は雄大である、神殿の紫の幕は崇高である、ア、紫よい哉、唯悲しい紫は、學校より不出來の通知の状袋の紫。

○蒲公英

社會の風潮は何故でしよう、可憐いひよろ／＼とした、色彩で飾つた蓮を悦んで、一寸無骨でも白髪は生へても倒れないと云ふ古武士の面影が忍ばれる蒲公英の花がすかれなものでしよう。

○化粧と花

お化粧がすむと、また苦がたたくて何色とも分らぬ二鉢の雛芥子を取上げて、一はそと頬摺し、一はそと接吻する、漸々苦が膨らんで

です阿片
がお好で
しがやう
傾城の傾
の女の前
身ではあ
りません
？

當て、と
らん。

ほと不
すは如
歸とよぶ

咲いた所を見ると、頬すりした方は白で、接吻した方は緋であつたまつと紅と白粉とが泌み込んで色が出來たのよ。

○すみれ

友よりのなづかしき玉章ごと、惜しき封開けば、ひらりと落ちし堇紫の色しほらし「何事も花にきいてよ」と、すみれ口に當て「何と告げられしや」と、尋ねれど、しほれて、あはれ答なし、友は何事を告げ給ひし。

○星の夜

晝のあひだ若様が、お父さま今朝郭公が啼きますつと云ひますと、さうか、それは珍らしい、もうそろ／＼啼く時分だからなと仰しや

を、床し
なづか
ど思ふ心
のかきむ
しらかれ
はいかよ
涙のよ
ほされざ
るべき。

闇を縫つ
て行くこ
いふとこ
ろ、何と
よく形容

つた、宵の十時頃、夕餉ゆうけの後かたづけをすました妾は、あまりによ
く清れた星の夜風の心地よきを身に受けながら、裏口づたび行くど
はなしにあるき出すのでした、あゝよくはれた晩だこと、数へきれ
ない星様は、大きいのや小さいのや、恰も何者か神秘をさゝやくか
のよゝ、却つてなまじい月夜よりは宜いなどゝ、獨言ちながら、ふと
吾にかへれば、ここや裏口から一町ばかりの小川の前、あらも一丸
木橋まで来たことゝ見れば、青い螢の唯一つすゝつ、すゝつと闇を
縫つて飛んで行く、さ星の一つ尾を引いて焼山の彼方へ……妾はこ
の景色を眺めて、か弱い女心に何さなく胸の中が塞がるような、今
身の上をつれなく思はれるで。

し得た心
のいな。

見るが如
し。

この時の
心おしは
りあるに
りあり。

流離變轉
は世の常
なり、こ
の女若し

あゝ恰度今夜のよゝな晩であつた、妾はまだ十一、お隣の銀ちゃん
や美みちゃんたちと、家の向ふの大橋あたりへ螢狩りに……何がさて
前に後ろに右に左に飛び交かふあまたの螢、と、自分の前に来たほと
る一つを、これのがすまいと一切夢中に追つて居たとき、清ではな
いかと、突然とつせんの聲の主を誰かと思れば、あなうれし、日頃幼心に寝
ても起きてもいとしくてなつかしくて、忘れられなかつた實の母……
「おつかさん!!」……と吾れを忘れて飛びついた唯一言、後はうれ
し涙に咽び入るばかり、物もいはず抱きしめたまゝ、抱きしめられ
たまゝ、愛の泉の潤るゝほど泣いて泣いて泣きわかれたその夜のこ

これ母なり
の母なり
しこそよ
けれも良
人になん
あからん
いかに薄
命を怨ず
ることをよ

戀しい東
の空……
どいふあ
たり前

と、今更身にしみぐさ思ひ出でられるが、あ、其のとき母上は何
と仰つしやりしぞ、妾は何と申し上げしぞ、……耳の底、心の奥、
手繰りたぐりて思ひ出すだに、あゝ悲しくて堪らない。

★ ★ ★ ★ ★

人の話しにうすく聞けば、妾のおつかさんは、静岡あたりの豪商
にのぞまれて、ともにアメリカに行つたとやら、今宵此の星の夜の
景色を眺めて、おつかさんは遠いく旅の空に、どんな事を考へて
居られるだらう？、アメリカと云へば東の方だと教はつた、あ、東
の空。

後の關係
より斯く
なけれは
ならぬと
ころ、凡そ
して凡筆
には、け
は書けぬ
と書けぬ
ところ

戀に憧
らる、
姫が

戀しい東の空、思はず太息をもらす途端。

「清や……清や……」

奥様がお呼びの聲、はつと自分に返つてあたりを見れば、ほたるは
皆草葉に身を宿して、今は犬の聲もなく寂寥とした田圃道を歸り行
くわが袂に、苗田を渡つて来る夜風が、今更ヒーヤリと感じるので
あります。 西島菊枝節録

○花の夜

蘭 燈

春雨しとくと櫻に注ぎ、微かなるさゝやき、花神の秘言のそれな
るか、花の氣漫にゆれて、夜はいたく更けぬ。

御前のさ
ま寫し得
て妙。

この侍女
ならでは
お使はで
きまいも
のよ、そ
のさ、や
きこそ寵
愛のよつ
て生ずる
ところ。

琴聲に和
するもの

今し姫君のかなづる琴の音は止みぬ、きりびやかにして見るも眩ま
金屏の、吉野の山の花盛り、滾んばかりに齧かれたるが、引きめぐ
らされて、それにうつらふ白銀の蘭燈、影あざやかに一間を照しぬ
美しくき姫は織手にさらくさ、床くうも歌筆細く染められたる短
冊、文箱の奥深く秘め、寵愛の侍女を招きて、何事をか暫しさや
かれぬ。

玉水の音、たかどのをめぐりて、寂たる夜は、いよく更け行きぬ

笛の音

月おぼろに空に匂ふ一夜、漫ろに興湧き、われはそことも無く彷徨
ひ出でぬ。

は笛韻さ
昔しより
寸法のき
まりしも
の。に戀
こゝに戀
の情はこ
もれるな
れ。落花
りさいふ
べきにや
美人の精
ならん。

こは戀と
いふには
あらねど

夜目にも白く見ゆる彼方の山より、微かに洩れくる笛の音、その調
べのいかに妙なる。

いつとなく森に近けば、笛の音はハタと止みぬ。

落花の吹雪浴びながら、たゞ一人木の間を別け入れば、雪の様な白
き衣着たる美しくしの女、櫻の古木に腰打ちかけておたる。

吾れの姿を見るより、彼れは、かなたの山の奥深くわけ入りぬ。

あゝ平和なる此の春の夜に、花の精の出でしならむか……?

○池の夕

いかにも心地よい夕暮でした、妾はお庭下駄のまゝ、小池の岸のベ
ンチに倚つて、夢で、ろに美はしい夕雲を眺めておますと、何か手

情緒の纏
綿するこ
ころ、な
か、く、な
戀にまさ
りて美く
しきも、
あり、
者、
見たい
か。見たま
ふに

蝶の魂の
み、住む星
には、
やさし

ラさしましたので、よく見ると、あゝそれはあはれな蝶でした、い
たでを貢つた蝶でした、思ふやうにもよう飛ばないで、次第く、に
下がつてきて、あゝあはれ、池に落ちてしまつた。
あゝ蝶！

そも何に害せられたのでせう、日ごとくにあの美はしい翅もて、
楽しく花訪づれて遊んだものを、そして又この楽しい春を飾つてく
れたものを。

あゝ今宵、汝の母はどんなに待つてをるだらう、汝の姉妹はいかに
さがすであらう、明日を約してわかれた花野の墓も、こよひはどん
な夢を見るでせう……ふと、気が付くと、いつかむかうの墳の

き世界な
るらむ。

題すでに
小さきと
いふ、小
さくて大
なるとこ
ろに味あ
り。
想像豊富
なり。

木の間に涼しお星が一ツ！

あゝ、あの蝶は最早あそこへ行つたのでせう？

○小さき美魂

蕾ながらに野の花の、冷たき土にかへると、

若うて逝きし妹の、靈想はなをも盡きずして。

この世を永久に愛天使の、かろきあや羽に抱かれて、

御空はるかにかけ離る、榮ある神の樂園に。

彩の羽ある天女と化して、夕べ月の桂男と語り、

羅合ふ若まゆに、星を笑む妹が美魂。

○はのめさ

詩情を解するにあらざればこの語をなし得ずこの詩を解し得ず

世の少女子が戀の

詩の御姫の、うつくしき、罪をつながむ、銀糸と、
朝、やはらかき春雨に、幼千草が美きゆめの、
にほひとけては、うつゝなく、理想の園にもつれては、
あや麗はしき、かげろふさ、艶いかな、君どわが、
戀をかざれる胸の彩糸。

○此の愁悶

あ、苦悶の己が身や、
千筋の糸のもつれては、
ありし昔を偲びては、
小なき胸に堪へ難み、
あ、憂愁のわが胸や、
解けぬを誰に恨むべき。
世にすてられし弱き子の、
漂ひ出でぬわれ知らず。

芽くむを春姫にさそはるゝ如くそいふは少女子の罪にあらざるに春姫の罪にあらざる

心緒の亂るゝに故ありむとやい

野べにたなびくうす霞、
み息なるらむ人の世の、
戀ぞ生命の少女子が、
背子いたはりて遊べるを、
白、くれなゐや紫の、
つかひの蝶の戯れを、
あゝいつはりの君故に、
亂れにみだれもつれては、
夕ぐれ低き夏ぐもの、
星も涙をもらすとき、
そは春姫のやはらかき、
御遊の駕駐まれば。
天女に似たる愛の手に、
見ては想のみだるゝに。
色美はしの花すみれ、
思へば君を偲ぶかな。
うちぶれ果てし我が胸や、
かへらぬ恨多きかな。
峯はくづれて西空の、
憂愁の影に身は洗み行く。

眞正面の
ら春川の
景をうつ
せしこと
ろをか
桃水暖
の意。

おだや
なる様
どうれ
ま。

○春の川五題

水かみや、桃花水にうつりて暖かく、猿の聲若うして川を渡る、桃の花、猿の聲、何方までや流れむ。

少しく下れば水緩かに巖奇なり、山櫻色淡うして、誇れば春の風ゆるう吹いてなぶる、散るや、花のふよき春の川に。

青柳、芽細やかにして川其の根を洗へば、岸にさく葦あやうくもゆらぎて、胡蝶一ついこへり。

春雨しどくと降りつ又暗れつ、行く雲静けき岸邊に、虹の目傘もつ少女、渡船待つらむ。

点景妙。

と、が妙
の妙なる
ところ。

俗語とし
て見るべ
からず。

君の得意

青葉しげれる下蔭に、眉毛白き翁、笑みもらしつ、弓なりにあげし釣竿には、濺刺たる魚大なり、きらめいて清く且つ美なり。

○ 其の下流二つに分る。

あやうげにかゝれる朽橋の下あたり、農の娘、菜を洗ひつ、清き眼色が黒ろうても白粉でなほる

心くろけりやいなほりやせぬ

○ 餘韻囀々。

日もうらゝかの淀みには、里の童子うちつれて、芦藪あたり、な、

これが戀
の心不勝
の男子も
戀は別す
もの何す
から、何
も神聖よ
ばはりな
さならな
ても。

よくふり

あなたは真に御深切な方ですこと……

その一言は肺腑まごころから出たのであつた、僕も男子です、何んの少女の

一言くらゐに魂たましいをうば、れるやうなことがありませう、けれども……

……けれども……この時はかりは、わが身ながら我身が分らぬほど

に有頂天外うてふてんがいに飛んだのです、なれど僕も男ですもの、女のために一

身を誤あやまるやうなことはありません、左様……勿論神聖もちろんの戀です、

微塵みじんじがれた戀ではありません、何んじやこ「戀しかるべき夜半の

月かな」左様々々、ある夜が實によい月夜でありました、おもひ出

されましますも、「人の命の惜しくもあるかな」と仰しやいよ、若しや

彼の夜の人が、花神とか、月神とかいふのでないならば、吃度まじ會つ

つめたも
のなり、
落ちな
らぬや
に御注
なさい
戀無情。
浮沈は人
世の常な
れ。

變轉。

て見せます、「むなしい物を思はざらまし」といふことになるに違ひ
ありませんよ、どうぞその三枚だけは私に取り戻してください……。

○花のゆくへ

そよ／＼と通ふ夜風に、さくら木の梢ゆるぎて、はら／＼と散るよ
花びら。

さら／＼と流るゝ水に、さくら花うきては沈み、沈みてはうきては
急ぐ。

川柳の下をくゞり、水ぐさのうへを撫で、香はたかしさくら花！
さる程に月日は早く、あたくかき春も逝きて、ひる暑き夏とはなり
ぬ。

夏の女神
さほこれ
をやいふ
らむ。

この景や
趣多し。

これ淨沈
のある所
以なれ。

循環の理

萩のこぼ

岸の邊に咲ける白百合しろゆり、女の神がしばし此世に、降りまして立てる姿か。

戀ひてにや日もすがら、さづれ波間なくよせて、うすさぬの裾ぬらし去る。

あゝされど此世は悲し、その榮はも夢のひととき、白百合も遂に散りぬ。

さくら花友を得たり、姓は岸名は白百合、打ちつれてともに流るゝ。さる程に月日は早く、夏もまたいつしか暮れて、秋の日も最中もなかとなりぬ。

野に生ひし萩の一本、あかつきの露をたへて、薄すすきより馴染なじみまはや

まはけるさ
まは一入
のながめ
ぞ。

誰がわが

も手のし

花となが

むるぞが

妬ましと

し。ねたま

世の辛き
を知らず
共に戀と
のほかな

き。

あゝされば此世はつらし、人の子はむとくも折りて、もていにぬ、家路さしつゝ。

美しくしき瓶かめに活いけられ、床の間のあさな夕ゆふなに、愛得めでしもしばしの隙すま。

日かず経へて色香は褪あせて、花ちれば埃ほこりさゝもに、捨てられぬ、背戸せとの小川に。

さくら花はた白百合は、亦一人友を得たり、姓は野邊、名は萩子！相ともに手をばつらねて、波まくら水みづのしとねや、ゆられてぞ流れゆくなる。

きを觀じ
つらむ。
少年とお
りふ中に
泥にまみ
れること
多し然り

花の美や
月の明や
天の戀さ

つく果はいづちの里ぞ、川遠く水ははるかに、雲白うみ空は青し。
あゝ、櫻、白百合、萩子、うらぶれてさすらひて可愛の花、なれ等
が行衛やいづこ！

○戀？

戀といふは如何なることであらう、人は戀しい、なづかしいといふ
が、如何なる境遇をいふのであらうか。
庭前に咲き満てる薔薇の花、彼方にさしのぼる月のさやけき、なん
と奇麗な花ではないか、何んぞ氣高い花ではないか、その香氣とい
ひ、その花容といひ、牡丹に似たれど誇り氣がなく、如何にも溫和
にして優しく、いかに高く薫じて賤しからず、そして白き薔薇の

地の戀と
の發せし
人の戀ふ
の戀ふに
ほどもに
を戀ふた
を戀ふた
なはため
戀はただ
人間にた
み限られ
しにはあ
らじかし

移り氣ないところは一段である、又あの月、くもりなき大空に、團
々とかゝつて居るところは、全然明鏡の磨きすましたやうである、
われはたゞこの花！この月！を愛するのではない、すべてが此の模
範に出來て居るならば、よく我心を得たものといふをばからぬ。
思へば去るところの散歩のとき、年は二八も過ぎたらん、容色も十人
なみすぐれて居たが、その温順な態姿といひ、一舉一動品格もあり
氣高く優しく、そしてわが遣せし洋巾を拾つて傳へられた言葉つき
の賤しからずして、しかも臆せぬところ、學藝の程も知られ、交際の
態を察せらるゝ、明治の令嬢とは彼が、まだその容姿が眼の底に存
するぞをかし、あゝこれが戀てふもの？即ち戀。

戀愛の解
釋、その
人により
てさまざま
まなり。

戀におけ
る覺悟は
此の如く
にして眞
の戀なり

○わが戀愛はこれ

戀！愛！われは決して戀愛てふことを云々するものではない、否な
戀愛は實に人情の發露するもので、七情といへど戀はその七情の外
の一つであつて、まさしく七情を概括したものである、さればこの
戀！この愛！、若しこれがなかつたならば人情を盡したものとといふ
ことはできない、たゞその戀！その愛！これが皮相ひさうより來るものが
多いから、全く俗了ぞくれうされて、戀愛の價値かちが、やゝすれば醜界しうかいに没し
去られるのである、人情として實に嘆かほしいことではないか、わ
が戀……別に吹聴ふいてうするほどではないが、試に言つて見やうならば、
他の戀即ち皮相の戀を弄するものとは、全く趣を異にして居ると思

愛なりと
いふべき
なれ。
見目より
心だてと
いふを
知らずや。

何んぞ醜
なりと云
はんや。

ふ。われは決して彼の玉の如き容貌やうぼうを愛するのではない、決して起た
てば芍葉しやくやく、坐れば牡丹あまぎ、歩く姿は百合花ゆりのはな的人てきを愛するものではな
い絃歌げんかの巧なるを愛するのでもなければ、世辭せじに巧なるを喜ぶので
もない、たゞ温和柔順の性であつて、まこと一家を修齊しうせいするの腕前うでまへ
があるまこと、子女を訓育くんいくするの學問があり、裁縫さいほうから料理りょうりいら、
よし家政を料理するの術を心得て、他日良妻なり賢母なりといはる
、だけの資材しざいに富んでさへ居たならば、たとへ三平二福的の醜しうはす
なはち醜なりといへど、われは寧ろこの人を戀ひ、この人を愛する
ものである。

○狹斜けうしゃのおとづれ

言葉のさ
ま少しふ
りたりど
いへど
その言ひ
まはしな
どなかな
かにおも
しらく見
らる。

妓女の名
を文中に
よみこむ
ことこの
のころの

この人を待乳下風のしみる^{まつちぢらし}と、寢屋さむき夜にひとりねの、病の
床はいと^{なほ}、思ひますほの篠すき、秋かぜそよぐ久方の空に
なくねはおや鶴の、小鶴をおもふそれならで、たよりを傳ふかりが
ねの、こゑもろともにくら邊に、おつる玉づさ誰よりと、手おそ
しと三つ扇、ひらきては讀み、讀みてはきた、巻きおさめてはまた
ひらき、なさけもなさけき深き玉川の、きよき川べに布さらす、し
づの女子のいくたびか、賤の緒環くりかへし、よむ玉章は深雪とく
春のはなやま梅ヶ枝に、ひらき粧ふ梅が香に、またかきまづる白菊
や、庭の玉菊千代梅や、むらさき匂ふふぢばかま、花たちはなの香
も深き、こひしき君が筆のあと、ゆびをり日かずかぞふれば、早や

流行にて
多くこの
例ある中
に、この
文の如き
はいとど
まさされ
るべし。

ある癖の士
が娼婦によ
病中によ
せしこと
ふみ。

幾月のゆめきくら、枕の橋のひがしなる小梅の里の隅田川、小町さ
くらや小ざくらの、にしきに勝る^{まさ}春の日に、うはきな蝶にさそはれ
て、隅田の花見の歸るさに、訪ひたまはりしそのときに、仇^{あだ}契^{ちぎ}
の仇^{あだ}夢^{ゆめ}を、むすびめ堅きしゆすの帯、とけてかさねし綾衣の、おも
てにのするおもかげを、忘れかつたる小まくらに、いくよねさめて
春も去る、夏さかはりしその日より、病の床にふし柴の、晝ばかり
なるうき心、うつらくと閉籠り、出でがたき身はなほさらし、思
ひはいとど増すかみみ、うつる面のやつれ髪、まさ返しては小萬く
さ、かきたきことの多けれど、流れさだめぬ水莖の、ふでの運びも
ま、ならぬ、うき川竹の人の目を、忍びてかくはかへり言、こひし

雪のあし
たの戀路
のさま思
ひ出られ

戀のおも
にも御國
の恩にお
もきには
かなはじ

き君へまぬらせて……

○雪によせて

正まんじもるとふりしきる、六つの花びら彼方むかし此方こちのきらひなく、見る
が間まに埋うめ籠こめて、世は白銀しろがねのそのやうに、いと美しくうな
りけるを、火桶ひおけに凭もたれて案あんじ煩わづらうこの身、それ誰たれれかしらま胸の
火こがに焦こがせる戀のまことをば……年久しうつもる戀路の願事ねがごとも、
やうく叶かなひてあれうれしやと、思ふ間もなくこんどの征露、御國
のためにかへられじと、惜あはしき別れもその時は、夢や現と過ぎしに
聞きけばその地は降り積る、雪は身長たけにあまるとか、さぞ寒さむからう
冷つめたからう、今日こそいかに過あしたまふや。

この言ひた
りの言ひた
くさめで
とめたい
く愛あいっし
くある。

おのれに
仇あし心の
あるとき

思へば積る胸のうさ、かよわき御身のさわりはせんが、女で役目が
すむならば、雪に生れしこの身をもて、君の難儀にかはらんに、思
へば身も世もあらぬこゝろ折をり聞ゆる隣家のしらべ。
わがものさ思へばかろし傘の雪……
さなりく、何んのこれしきの雪が重かるか、戀の軍荷も君ゆるな
らば、何とて厭ふことやあらん、さりとは君、今ごろはいつに暮
したまふや……

○秋 草

秋はこと更物淋しく、過ぎにしことをおもふにつけ、胸の結むすばれも
いやますを、せめては秋草を眺めて、忘るゝよしおとるなとばやと

は、見聞のい
も、の、
も、の、
づ、の、
媒、介、は、な
ら、ぬ、あ、な
し、ほ、ど、く
戀、ほ、ど、く
は、あ、ら、じ
な、あ、ら、じ
そ、の、戀、の
は、し、た、な
き、こ、と、な
む、し、ろ、あ
は、れ、を、催
さ、る、も、
の、か、な、

こゝを假居に今様など口すさぶ折もをりどて隣家の高樓

わしや女郎花なかくに、百合の風情はなけれども、萩にふす猪のたゞ一筋に、桔梗の花の濃くあつく、しのぶにあまる憂さおもひ、いつか尾花の色に出て、日ごとます穂の戀の暗。

その調は低けれど、節おもしろう端唄の一曲、思ひ出す、思ひ出す女郎花の百合の風情がないとは、いつもあの人のすね言葉、負けぬ氣に百合は……百合は……と稱へても、彼れが女郎花たるその風情こそ、まことその人の特長なるを、いつものやうに言ひからかひ、むつとして別れしその儘音信さへ得せぬ、聞けばこの地を去りしこや、飽きもあかれもせぬ交情を、ア、われ過てり、誤れり、この憂

終に眞事
の奥さん
旦那さま
どなるな
きか。
失戀。

き思ひは誰がさす、彼れの氣性もかねて知る、定めしわれを恨みもし、戀しくもおもふらん、ア、またも今宵は憂きに堪はざらしむるか、實に尾花のそれなりで、日ごとにもさる戀の暗。

戀七趣

(一) 仲よしの武ちやんに辭子、日常よき御庭先、色づきし楓樹の下散りくる紅葉かきあつめて、あごけなき飯事遊び、妾が奥さん貴郎が旦那よ。潔らけく稚なき戀。

(二) 程近き尼寺に尼僧一人殖はぬ、年齢は十九か、まだ二十にはなるまじ、花耻かしきか海はせ、白魚の如き華奢の手に珠數爪繰るいざらしと、聞けば生命とまで焦れし男に捨てられてとか、傷々し

實に果敢なき心。

狂人の戀

この戀多きをいかにせん。

き戀。

(三) 來年はそなたも十七、肩上げはおこりなされ、義雄も大學を卒うつむゆる程に……俯くびすじきし首筋雪より白く、齒あかぬさしたる耳朶みみたがの殊更目立ちて嬉うれしき戀。

(四) いづれ添つはれぬ縁、一層二人共々に淵ふち川に身を投げて、未來みらいは一蓮いちれん托たく生たくせうあわれ果敢はかなき戀。

(五) 逢あひたや見たやの念つひは募つれど、思おもひ任せぬ籠かごの鳥、儘ままよ八百屋お七の昔むかしに倣なまへど、淺あ墓かみにもパツと照てせし一摩すりの火、數かず奇きを凝こせし一掃いっさうは見る間に煙けむり、怖おそろしき戀。

(六) 廂ひまし髪かみに海老茶えいぢあ、製せい服ふくに角かく帽ぼう、星ほしよ草くさ、エエイイ氣き障ざうな戀。

にせん。

言ことひ寄よることおかし。

戀こひの情なさけに木きの芽こぼれだにちちより萌もはち初はつむのを多おほしと

(七) 先方まへも男おとこの子こ此方こゝも男おとこの子こ、意い氣き互たがひに投な合あして、會あへば快談くわいたん湧わくが如ごとく、或ある時は樂たのしみも分わけ憂うれひも分わけ、情なさけ交まじ骨ほね肉にくの同どう胞ぱうより濃こく何なにとはなしに離わかれ難がたなき思おもひぞする、これこゝろも戀こひだ。

戀の自白

あはれ懐なついしの蝶ちょう子の君きみ!

此頃このときは如何いかにお暮くしてか、手ては戀こひにやつれたり、果敢はかなき想おもひになりし。水みづ莖くさの跡あと笑わらひ給たまふな。

春はる來きれば、萌もはち出でづ千草せんそう、百ひゃく花かの錦にしき! 芳かほ香かほせまる山やまの下道したみちに戯あそれ遊あそぶ御身おんみの姿すがた! 我われは覺おぼる戀こひをおぼぬ。

夏なつ來きれば、綠きぬの樹き蔭かげ奥おく深ふかう、澄すみむ谷川やがわの水鏡みづかがた、うつして憩やすふ姿すがた! 我われ

す。

こゝに至りては、何ともいふべき言葉なし。

は尙も戀をつゞけぬ。

秋來れば、葉末に宿る白玉や、橋の上置く初霜に、瘦せ細りたる御身の姿！遠目見ては可愛さ、いぢらしさ、我は更に戀を好みぬ。

冬來れば、地を閉ざす白雪、覺を運ぶ寒風！そなたの姿何處まで、ながめやる我が身も在らぬ果敢なの運命、只假の世に相見たしの念に驅られては、又もや深き戀を覺えぬ。

かく自白するこのわが身こそ、春の野にさく菜の花にてはべるなれ

小松原

「俊夫様！」

小松の影の處々に思ひに瘦せし身の影を、細長う交へてまゝろ歩き

可憐の乙

女よ、誰か斯くの如くならしめしぞ

二人の胸にわたるまるとこのろ、その趣や深く愛らし。

の俊夫が後に、美しきさはれ密々の呼聲捕ひ得ざりし想より我に回て振り向く俊夫が傍にそと走せ寄つた色白の人。小豆色矢飛白の裕一つに、水淺黄色の帯を、裕かな背に小さくびつたりと結んで、眞白き襟のさて品も宜う。

「千賀さんでしたか」

俊夫は褪せたる其顔に、大人な氣もなく紅葉を散らした、大島緋の丈長き羽織の肩を張らして、両手を白の兵兒帯の間に差し込んで、うつむき見る芝生の上に夜露重げの紫莖一もこ。無言に立止まれば千賀子も無言に、其福々しき手に摘みあげてそと接吻つ。

「あの俊夫様……奥様を可愛がつてあげて下さいまし」と當突に

言ひがた
きこころ
なり。

さもあら
ん。

切なる情
俊夫氏果
して如何
の感をか
なすや。

語尾をや、きつぱりと言ひ出でた。驚き顔に、俊夫は千賀子の顔を見入つてまた差しうつむいた。

「私、突然にこんな事申上げて……でも何から先に申上げて宜いのやらわからないのですもの……」

「我存じて居りますの、貴君が奥様にお幸らくなさるのを……毎朝婆やさんに伺つて能く存じて居ります。お可哀そうぢやありませんか御容子と言ひお心立てと言ひ是と言つてお悪るい處の無いあの秋子様と、どうして彼んなに冷淡になさるんでせうつて婆やさんがいつも私に口説くのでございます。それは貴君がお心に召さなかつたのを何したのは存じて居りますけれど……俊夫様女

無理なら
ず。

理由あり
君知らず
や。

と言ふものは弱いものでございますよ。一生を頼む夫に素氣なくされちやあ……まあ秋子様のお心はどんなでせう……俊夫様！何卒可愛がつてあげて下といまし」

「私何もこんな事を、貴君に申上げずとも……とお思ひなさるでせうけれど私、秋子様がお可愛そうでお可哀そうでこんな差出がましき事を申上げるので御座います、またそうして駄かなければ私の爲にも……」

「俊夫様……實は私はあの桑原さんから疑はれて居るので御座います」

愕然たら
ざるを得
ざるなり

斯くなる
べき道理
なり

潔白なり
や否や。

「わう」と口惜し氣に唇を噛む千賀子の白き面を、愕然俊夫は見入つた。

「いゝに親御さんの情として決して無理ではございません。我の宅は貴君のお隣り、常に足繁く出入りをして居るのですもの………
…それに貴君が秋子嬢に冷淡になされば………」

「私は決して怒りません怨みもいたしません、口惜しうは御座いますけれど私、潔白なことは神様が存じて居らつしやいますもの………たゞ私の身の疑ひを晴らして下さるのは貴君のお心一つで御座います、貴君がお優しくなさる、それ一つでございます」

「……………」

「俊夫様！貴君のお心は私能く存じて居ります」

後れ毛諸共、白きハンカチを噛みめめて月に立つ影のやがて俄破がま芝生に伏して。

「私もお慕したひ申して居りました！」

「はつ千賀さんも……………」

松並木を通る馬の鈴月に冴さえて、誰たが流しゆくか寂しの歌。

君と別れて松原ゆけば……………」

松の露やら涙やら……………」

遠き野寺の鐘の響消えて、月白し。

二人は終
に相抱い
て怨みを
月に語り

この一言
が終に秋
子を愛す
るを得ざ
らしむる
なきか。

しならん

あたりの景色をろくろ細膩なり

吉三なんぞ戀にあなごがるなや

奇景絶景

「俊夫さん！奥様を可愛がつてあげて下さいまし」

○涙手摺昔木偶 節録種彦

海潮漫々として、百國の千帆望に入つて至り、此頃の暖氣に催され、花は遠近に咲きみち、水や空、雲や花ともわけ難く、ほもいはれざる景色なれば、やがて櫻が本に庭を敷かしめ、少時酒醺を催し思はず數盃を傾むけ、吉三は大に酔を發し、此席を退でけるが、風朝かに面をうち、心持よきに乗じ、供人をもしたがへず、手ぢかき櫻の枝を折り、酒をもりたる壺盧を掛け、浪々踏々として、風に隨ふ落葉のごとく、水に漂ふ遊魚の思ひして、油堤をうかれ歩行きつ、手に持つ扇を前なる川にとり落しけるが、折しも一陣の風おとし

これ胡蝶の一隻ならざるなきか

菖蒲の心やいらむ

きたり、爛熳たる花の梢を吹きちらせば、いつこともなく胡蝶四つとびいでつ、扇につけたる佩香を、花の香と思ひけん、翼を撲ち、鬚を揺かし、おりつ、あがりつ舞ひ遊び、水のまに／＼流れ行く、扇を慕ひて飛廻れば、吉三は興あることにおもひ、これも流にこたがひて、堤を下り、とある庵の前にてたり、この流は則ち侍従川にて、庵は佐吾七が住家なり、ときに障子とおしあけて、立ち出る處女あり、年はいまだ三五にすぎずとおぼしく、よろづ臆しがちにて、衣の着なしは童めけど、天性の美形玉の如く、顔は桃季の花を賺き、膚は雪を束ねしに似たり、これ佐吾七の妹菖蒲なり、吉三も不慮に心うかれ、何をかなすとまもりあるに、菖蒲は行器をた

巧思、この
般戀のこ
の般戀のこ
清々とし
てうれし

訝しきか
な。

相思の情
いと嬉し
くぞある

づさへつ、徐やかに庭におりたち、川水を汲とりて、手もたゆげに
竹椽にはこび、花瓶に水を湛へ、再川岸にあゆみより、ひきしこぎ
の帯に笄を結び、吉三がとりおとせし扇に投かけ、打からみてひき
よせんとなしけるが、一つの蝶に笄やあたりけん、憐むべし羽をた
れて水面に落ち、散浮く花に伴はれ、いづこともなく流れけり、其
餘の胡蝶もこれにおごろき、二つの蝶は吉三が彷徨む邊に來りて消
亡せ、又一の蝶は障子を開きて窺ひ居たる、佐吾七が懷中に飛いり
ければ、佐吾七もふかく驚ろき、障子破とたてきりぬ、吉三は更に
是をしらず、なほも菖蒲が顔の艶なるを見とれ居たり、さて菖蒲は
辛うじて、扇を取りあげよく見るに、要に佩香を結びさげ、一首の

小説の
この般の
こと多し

戀を語る
に今昔の
感をもよ
ほさる。
説明し得
てよし。

歌を書付けたり、五月雨に池の眞薦の水越えて、とまでは吟じけれ
ど、あとにはとこ文字の走り書なれば、讀み勞ひてしばしうち案ず
るを、吉三は片折戸の外側より、いづれ菖蒲とひきぞわづらふ、と
いひつ、たちづるを熟々とみるに、彼眞雅僧都が心をあやませし、
業平が童たちはいざしらず、又世に類なき美少年なりければ、菖蒲
は顔さと赧うなし、轟く胸をやうくにおしなだめ、君はいかなる
おん方にて何の故にてかゝるいふせき土生家にはいたらせ玉へし、
又妾が名をよくも知り、呼かけ玉ひし不審さよ、さ云ひければ、吉
三打ち笑ひ、さてはおん身は菖蒲さよぶならん、我おもはずも歌
の句を繼ぎ、おん身が名をしりたるも不思議なり、又今さりあげし

菅蒲なる
 ものす
 中に入る
 戀人の手
 の觸れし
 もの返し
 どのふし
 あたふべ
 き。

おのづか
 らなる三

其扇は、我がをさなき筆の跡なり、聞説源の義經公、あやまつて弓
 を海中にとり落し、敵に小兵をしようさじと取返し玉ひしは、八島の
 軍物語、これはそれに引替へ、わが筆力の拙きを知れじとてぞ來り
 たり、その扇疾く返し玉へといふに、菅蒲打微笑み、響にはこの歌
 を吟じ玉ひしを、思へ違へて妾が名を知らせまぬらせ、今又御物語
 を聞はべりて、この歌は君が水莖の跡なることを知れり、さあらい
 よく返さじと、袖の振にて扇を抱き、遊ぐるを追て、思はず障子
 の内に立いり、邊を見るに死れたるながらも、家は清氣に作りなし
 床とおぼしきに雛をかざりたり。吉三は何といひいでん縁もなく、
 頓て携へきたりし吸筒を取いだせば、菅蒲もさし心得、雛の盃とり

扇の要の
 ばらなく
 さはなれ
 ばなれに
 なること
 は世の常
 と多きこ
 となれ。

や九度。

二人とも
 すでに戀
 るに馴れ
 るもた

下し、さし出するいと惻怆なり、吉三はますます心持迷ひ、まづ一
 盃を傾け、盃を菅蒲にあたへていひけるは、夫扇を人を送るときは
 縁の絶ゆるよしいひ傳へ、ゆゑとて思むとも今は甲斐あらじ、と
 詠せし歌もあんなれ、我と御身はさる中にしもあらねば、結ばぬ夢
 の覺めなんと悔むに似たれど、思はずも此處に來り日頃相馴れしを
 とく語ひつれば、今となりて縁をた、んも歎かはし、ひたすら其扇
 かへさせ給へと聞ゆれば、菅蒲うつくしく打ち笑ひ、扇を返しまい
 らすはいさやすきことに侍れど、かゝる折もあらずば、いかで賤が
 伏屋にいたらせ給ふことのあるべき、此扇あながち惜しと覺さば、
 日毎に徒然訪はせ給へ、自來返し申さん期もあるべし、君が投のこ

如し。

吉三もこ
こに至り
ては騎虎
の勢は問
はては胸
かには胸
安まるこ
んやあら

ますく
佳境に入
り。

とばを實として、答へまおらすもいとをさなして止みぬ、吉三は側の雛を指し、夫源氏物語に十に餘りぬる人は雛遊は忌み侍べるものをとあれど、今は押靡べて、女夫の繁榮を賀ぎ、水魚の中を祝するものとはなれり、御身もこの如く雛を祭るは、はやくも言かはしつる良人ありや、又はをさなきその折から末は夫婦になすべしと、親と親とが結號し方もやある、兎にも角にも御身の素性聞かまほしと問ければ、菖蒲答へて、妾は元皇都のものなるが、父母も三歳の時亡せたまひ、一人の兄を力にてこの國に移り住み、六浦の海に網りして、細き煙もたねぐに、宿も定めぬ海士の子の、いかでか結名づけし人のあるべきぞといふに、吉三又曰く、世には似たるこ

この戀終
に如何に
なるらむ
そは推す
まかせて

ともあるもの哉、われも稚ははき、皇都がたの者なるが往年この國に住居をうつし、今は琵琶小路にて、おろく人にも知られたる、富度の吉三といふ者なり、嚮にも聞ゆるごとく、落せし扇のあとを慕ひ、不圖もこの家にきたり、一盞を酌かはすも、宿せよりの契なるらめ、殊におん身が便なき物語を聞くに堪へず、うちつけなることにはあれど、若われに仕へなば、兄も共に世をやすく送らすべしといへば、菖蒲は深う恥て、はかしくも答へず。節録(種彦作)

落花戀終

明治四十年六月十五日印刷
明治四十年六月二十日發行

著者 露香夢仙

大阪市東區唐物町四丁目十八番地

發行者 立川熊次郎

大阪市西區阿波座下通二丁目三三九

印刷者 河野圭藏

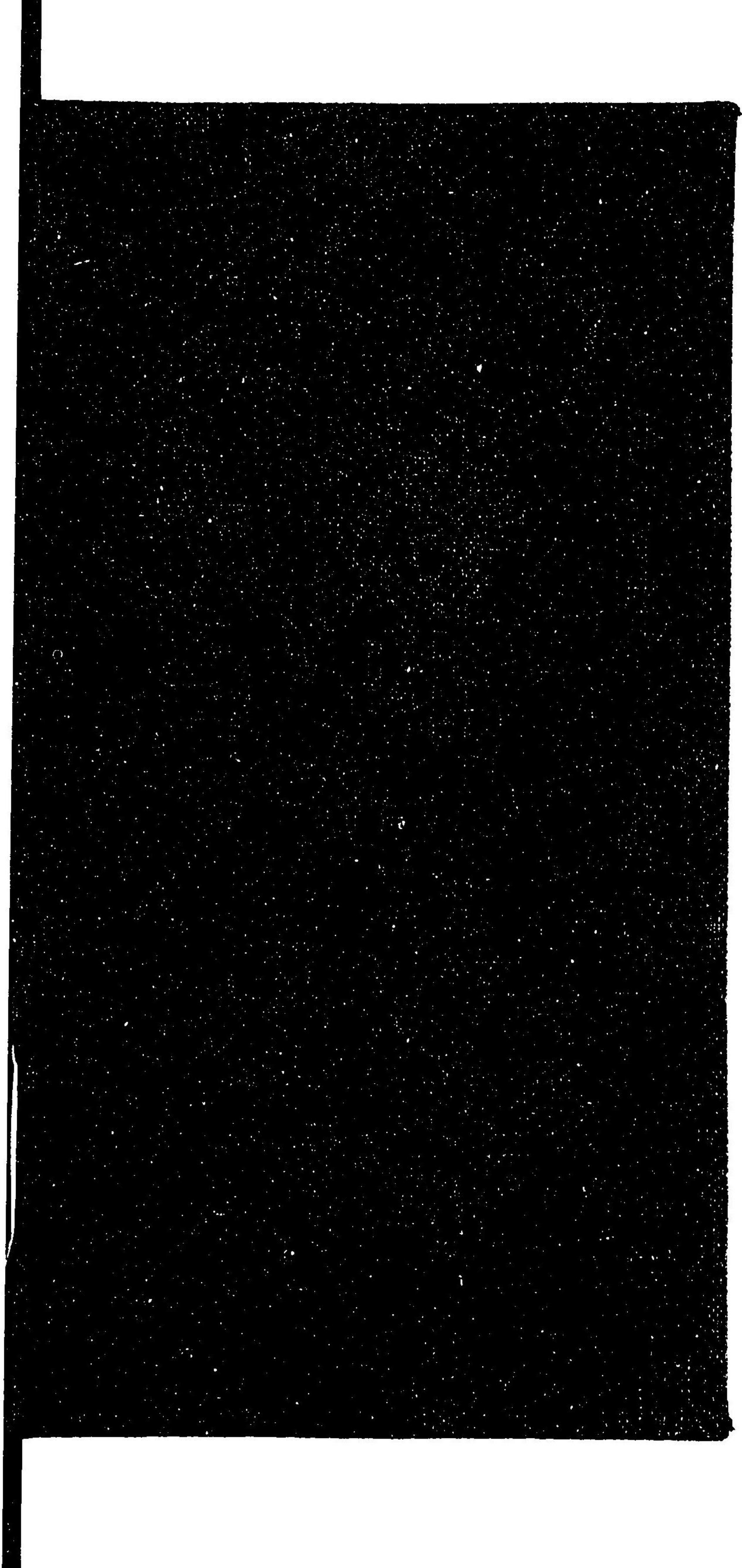


發賣元

立川文明堂

大阪市東區唐物心齋橋西へ入

253
484



205134-000-4

特63-698

恋

露香 夢仙/著

M40

EDV-0142

